

夏目漱石「坊つちやん」

——延岡は何故「うらなり」の転勤先なのか——

菅 邦 男

一、延岡のイメージへの疑問

漱石の「坊つちやん」には、うらなり（古賀）の転勤先として延岡（宮崎県）が設定されている。この延岡の描かれ方が宮崎の人間から見ると奇異で、地元作家中村地平は「仕事机」の中で、次のように言っている。

「日向の国も北の方の、豊後との国さかい近くに延岡という、水の豊かな、小邑がある。夏目漱石の「坊つちやん」によると、人間と猿とが半々ずつ住まっているような土地だそうであるが、いくらそれが執筆された昔の頃でも、そんななばかなことはない。内藤七万五千石の旧城下町で、む

しろどちらかといえば、美人の多い町である。」

美人の多い町かどうかはともかく、延岡は中村の言うように平地の城下町である。むしろ海沿いの町である。

延岡は、「坊つちやん」の中で次のように描かれている。

坊つちやん（おれ）に「うらなり」の転勤先を聞かれた赤シャツは「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上つて行くことになりました」と答えている。延岡は僻地手当が出るような土地なのである。それを聞いた坊つちやんは、帰宅して次のように考える。

「世間には随分気の知れない男が居る。家屋敷は勿論、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、

知らぬ他国へ苦勞を求めに出る。それも花の都の電車が通つてゐる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。

おれは船つきのい、此処へ来てさへ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたいなつた。延岡と云へば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云ふ所によると船から上がつて、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないさうだ。名前を聞いてさへ、開けた所とは思へない。猿と人が半々に住んでる様な気がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくもないだろうに、何と云ふ物教奇だ。」

これは赤シャツや坊つちゃんだけの認識ではない。登場人物一般が抱く延岡のイメージである。うらなりの送別会で、山嵐は次のように言っている。

「延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだらう。が、聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代撲直の氣風を帯びて居るさうである。心にもない御世辭を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君の如き温良篤厚の士は必ず其地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君の爲めに此転任を祝するのである。」

山嵐に拠れば、延岡は上代朴直の氣風を帯びた人間が住む、物質に事欠く僻遠の地なのである。上代朴直の氣風と

はむろん赤シャツ等への皮肉だが、延岡への褒め言葉でもあり、現代から懸け離れた土地の意味でもある。

この言われようには、宮崎の人間なら誰しも異を唱えたくなる。平岡敏夫著『漱石 ある佐幕派子女の物語』に掲載されている女子大生（延岡市出身）のレポートでは、この書きようが「大変気に入らない」と言い、次のように続けている（講義のレポート）。

「^⑫しかし、この現代でさえ、多くの人がどこにあるか知らない延岡という土地が、『坊つちゃん』という有名な作品にその名を使われていることは注目に値することではないだろうか。逆に考えれば、現代でさえ有名になれない延岡だからあんな書かれようなんだとも思えるが、延岡は、本来は城下町であり、猿と人が半々ということは決してない。また海沿いの町で山に囲まれてはいるが、山の中ではない。」

ところで、どうして『坊つちゃん』に延岡という地名が出てくるのだろうか。

それは、やはり漱石の熊本体験が関係しているのではないだろうか。延岡は、熊本にも割と近い。（略）漱石も、延岡という地名を何度も耳にしたのではないだろうか。そのときに想像した延岡のイメージがそのまま『坊つちゃん』に書かれている延岡の記述に現れているのではないだろうか。いずれにしても、延岡に対する漱石の認識が間違つて

いたことにはわりはない。」

延岡は海沿いの城下町であり、現代でも知られていない延岡が何故「坊つちゃん」に出て来るのか疑問を呈している。漱石が熊本在任時に延岡の名を耳にした時のイメージがそのまま使われたのだろうと推測しているが、延岡の人間としては素直な感想であり、もつともな疑問だと思われる。

これに対して平岡は、自分の見解を詳しく述べている。この見解に沿いながら、以上の問題について考えてみることにする。

二、平岡敏夫の見解

平岡は「坊つちゃん」に描かれた延岡は、実は飢肥（現日南市）なのではないかという。

「延岡、実は飢肥のイメージ、というのにはむろん私の妄想であるが、その妄想には漱石が安井息軒の文に親しんでいたということがある。『坊つちゃん』発表の前月の『文章世界』（明39・3）に『余が文章に裨益せし書物』という談話筆記が掲載されているが、そこに『安井息軒の文は今も時々読むが、軽薄でなく、浅薄でなくてよい。』とある。また『吾輩は猫である』第二回（明38・2）にも、苦沙弥の日記として『安井息軒も大変此按摩術を愛して居た。』とある。『坊つちゃん』執筆前の漱石に安井息軒が親しく蘇っ

ていたことは言えるし、その出身地飢肥も意識されていたことだろう。レポート^⑫は猿と人が半々などとあるところを引いているが、『僻遠の地』であることを強調する一方で、『聞く所によれば風俗の頗る淳朴な所で、職員生徒悉く上代撲直の氣風を帯びて居るさうである。心にもない御世辭を振り蒔いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずる』云々と送別会で山嵐に言わせている。これはむろん赤シャツやマドンナ等への批判として発想されているのだが、安井息軒の文が軽薄、浅薄でなくて、よいというのとも通じている。

『延岡』は現実の延岡でなくてもよく、赤シャツの言からすれば、まさに船で延岡へ、そこから馬車で一日、宮崎へ、宮崎からさらに山あいへ俣で一日といった感のある飢肥のようなイメージで『坊つちゃん』において想定されていると言つてもよい。こういう『僻遠の地』に追いやられるうらなりの運命こそ、佐幕派の悲酸をもつとも深く示すものであり、『おれ』の運命と表裏をなすものであった。」

平岡敏夫が延岡＝飢肥説の根拠として挙げているのは、第一に、漱石が安井息軒の文を「軽薄、浅薄でなくて、よい」とし、それが山嵐の言う延岡のイメージ「上代朴直の氣風を持つ地」に重なること、また息軒の出身地飢肥を漱石が意識していたであろうこと、第二に延岡で船から下り、馬車で宮崎へ行き、そこから俣で一日飢肥まで行けば、行

程に不自然さが無いということである。

三、明治時代の航路

まず第一の根拠だが、安井息軒は飢肥藩の儒学者ではあるが出身地は飢肥(日南市)ではない。清武(宮崎郡)である。飢肥に藩校はあったが旧制中学はない。宮崎から清武ならば当時でも俥(人力車)で行けたかも知れないが、飢肥までは山越えであり、とても人力車で行けたとは思えない。『門川町史』(昭和四九年・門川町)にも「人力車は主として市内および近郊の交通に用いられ、遠方へ行くには馬車を用いられたのである。」とある。

平岡が飢肥を想起したのは、むしろ第二の行程の問題であらう。「坊つちゃん」には「赤シャツの云ふ所によると船から上がつて、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないさうだ。」とある。延岡は県北の町である。これをそのまま受け取れば、延岡近郊の港から上陸し、一日馬車に乗つて南下し宮崎へ行く。そこからさらに一日いずれかの方角へ車に乗つて行く。これは宮崎の人間から見ても不可解である。平岡がこの行程から「延岡」は実は「飢肥」であると仮定したのも分からないではない。しかし「延岡」と明記されている以上、「延岡は現実の延岡でなくてもよく(平岡)というわけにはいかないだろう。

赤シャツはなぜこのような説明をしたのだろうか。これには当時の交通事情が深く関係している。

「職員ノ任免ハ奉任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル職員ノ任免ハ文部大臣之ヲ奏薦宣行シ 判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル者ハ府県知事之ヲ専行スル」(第三条)

当時の中学校教員は判任文官と同じ待遇を受け、その任命権は県知事にあつた。辞令など任命権者に関する用があるのなら、延岡の中学校に赴任するのにわざわざ遠く離れた宮崎(県庁)へ行った説明がつく。「坊つちゃん」では学校で校長から辞令を受け取るようになっていて、それは県庁所在地にある中学校だからだろう。漱石は「私の個人主義」の中で、松山を「立つ時に知事が留めてくれましたが」と言っている。辞令ならずとも、任命権者である知事周辺とは何らかの形で接触があつたのだと思われる。

ただ、石川恒太郎の考え方だと、土々呂港(現延岡市)に上陸し、馬車で宮崎へ行き、延岡へ引き返す、つまり往復することになる。往復するのに、「船から上がつて、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないさうだ。」という言い方をするだろうか。「着けない」という言い方は、往復する時に使う表現ではない。

「坊つちゃん」は、野だぐうらなりの送別会で日清戦争当時流行した「日清談判破裂して」を歌っていることから分かるように、漱石の松山中学時代(明治二八年頃)を舞台として

郷土史家の石川恒太郎は「県北交通物語」(昭和一〇年)の中で、明治時代の宮崎県は幌馬車が殆ど唯一の交通機関であつたと述べている(人力車では活動の範囲が限られた)。「スピードからいふならばガタ馬車は全くお話にならないほど悠長なもので延岡から宮崎に行くには一日を要したのである。その事について夏目漱石の『坊つちゃん』はうらなり先生が延岡中学校に転任するといふ時に次のやうにいつてゐる。(略)

船から上つて宮崎に行くのは辞令を受取りに行くのだから、土々呂から上陸すればいくら幌馬車だつて一時間あれば延岡に着く。

宮崎延岡間は、赤シャツの言うとおりの馬車で一日かつたのである。宮崎へは辞令を受け取りに行くというのは卓見だろう。

明治二四年二月二日の勅令第二百四十四号「朕公立中学校専門学校技芸学校職員名称待遇及任免ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム」の第二条及び第三条には、次のようにある。

「学校長教諭助教諭舎監書記ハ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受ク但学校ノ等位種類等ニ依リ学校長教諭一名ハ特ニ奉任文官ト同一ノ待遇ヲ受ケシムルコトアルヘシ」(第二条)

『大阪商船株式会社五十年史』(昭和九年)によると、この頃大阪・宮崎間の航路は、大阪鹿児島線(大阪・神戸・細島・油津・鹿児島)、大阪細島線(大阪・神戸・高松・多度津・今治・三津浜・長浜・別府・大分・佐賀関・臼杵・佐伯・土々呂・細島)の二つがあつた。大阪鹿児島線は月八回、大阪細島線は隔日、「坊つちゃん」執筆時には前者が月一五回、後者は毎日の運行である。大阪細島線は明治三九年の九月から三津浜寄港を廃止しているが、「坊つちゃん」の発表は三九年四月であるから、執筆時にも船は三津浜に寄港していた。うらなりが宮崎を経て延岡に赴任するには、まず、愛媛の三津浜から大阪細島線に乗り、細島まで行く。細島から大阪鹿児島線で油津(現日南市)まで行き、油津から馬車で宮崎へ出る。県庁で用を済まし、馬車で更に一日かけて延岡まで行く(馬車の駅は県庁の傍にあつた)。

田山花袋の「日向の海岸」では、細島港に着いた汽船は「今夜の十時、此処を立つて、明日の朝の八九時に、内海港に入るのであるといふことである。」とあるから、内海よりも遠い油津までは一二時間近くかかつたと思われる。油津宮崎間は直線距離で言えば延岡宮崎間の約半分だが、険しい山で隔てられている。馬車でどのくらいの時間がかつたのか分らないが、「船から上がつて、一日馬車へ乗つて」というのは、宮崎へ着くのは夕方近くになるとい

味であろう。

花袋は細島に宿泊し、翌朝宮崎まで馬車で行ったのだが、「汽船の上の暑い甲板の上に苦しんだ私は、今度は朝日夕日のさす狭い馬車の中で長い路を苦しまなければならなかつた。」と言っている。宮崎から延岡へは、朝日から夕日まで、文字通り丸一日かかったのである。

赤シャツの言う「船から上がった」云々は、このような意味なのである。

では、延岡は何故山中の町とされたのか。

四、「山中の延岡」のイメージ

前述したように、現実の延岡は三方を山に囲まれた海辺の町である。東側だけが海（太平洋）に面している。したがって延岡に寄港する航路があれば、「大変な山の中」というイメージは生まれなかつたのかも知れない。坊っちゃんも「おれは船つきのい、此処へ来てさへ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。」と言っている。船つきの良い所（客船の）であれば、イメージはまた違っていたのだろう。延岡も明治二年頃には大阪細島線の寄港地だったのだが、二四年に土々呂港に変更になっていた。しかし寄港地だったとしても、当時の延岡港は「船つきの良い所」とも言えなかつたようである。

当時、県内随一の港は細島港（現日向市）だった。田山

奥深い湾内の港なのである。

翌朝、花袋は宮崎行き馬車に乗り込むのだが、この文の最後で、当手を振り返りながら、次のように述べている。

「今では宮崎の方から行くと、広瀬、高鍋、川南、都農、美々津、岩脇、富高、などといふ諸駅を経て延岡へと行つて居る。細島港は富高から東に入る。延岡が已に山の中であるが、これから益々山地に入つて、トンネルがあつたり翠嵐がなびいたりする。」

田山花袋は、日豊本線全面開通（大正一二年二月）後の、昭和五年段階においても、延岡は「山の中」だと認識していたのである。

『宮崎県の歴史』（山川出版 一九九九年）は、鉄道が近隣県に普及するにつれて宮崎は不便な所という感が強くなったと述べている。

「鉄道敷設法で長崎本線が第二期線に指定され、明治一十七年鹿児島本線（肥薩線回り）が第一期線に繰りあげられると、宮崎県は所要時間や頻繁性・安全性の面で、遠方との感が強くなった。のちに宮崎県は、県境の時間のかかる鉄道と屈曲した道路から『陸の孤島』といわれるようになり、（略）戦前の県の位置づけにまで用いられている。このような県民意識は、明治後半の鉄道建設の遅れによって生じ、戦後の航空路が整備されるまでのあいだに再確認されたのである。」

花袋は「日向の海岸」（昭和五年）の中で、まだ日豊線の開通していない時代に日向路を旅した時のことを書いている。夜半に別府を出航した汽船は、翌日夕日が沈む頃に細島に着く。

「岸には、松林——それも余り美しくはない松林が疎らに並んでゐるのが見えた。やがて艇は陸の方からやつて来た。汽船は汽笛を鳴らして留つた。静かな細島の港が私の眼に映つたのは、もう夕暮近い頃であつた。夕日は既に落ちやうとして、その余照が深く入込んで港の波を赤く染めてゐた。港の前に、丸い草山があるが、その一面にさし残つた夕日の、静かに私の旅の心に染みだ。」

だが、細島港に降り立った田山花袋は驚く。細島港が、自分が思っていた港とはあまりに懸け離れていたからである。

「こんな港だとは思はなかつた。日向灘唯一の良港だといふ細島の港が……。又は唯一の暴風の時の避難港として聞えた港が……。」

「日向灘唯一の良港」として知られていた細島港は、田山花袋が驚くほどに鄙びた所だったのである。まして当時の延岡港や土々呂港がどのような港だったか、想像に難くない。鄙びた細島港で下船し、馬車で山道を延岡まで行くとなれば、延岡が山の中の町という印象を与えたとしても不思議ではない。延岡に近い土々呂港にしても、山に囲まれた

大分県境から鉄道で延岡に入るにしても深い山越えであり、山の中の延岡というイメージは払拭し得なかつたのである。

では、なぜ漱石は「うらなり」の転動先として延岡を設定したのか。それは西南戦争との関係である。

五、西南戦争と延岡

西南戦争は明治十年（一八七七）二月に始まる。戦場は主として熊本、宮崎、鹿児島で、熊本城攻撃を戦端とする。西郷軍は熊本・宮崎各地を敗走し、延岡に追いつめられる。小川原正道著『西南戦争』（中公新書）によれば、薩軍（西郷軍）は市内南方にある愛宕山を中心に防衛体制を敷き政府軍を迎え撃つたが陥落、市街戦を避け、北方の和田越の峠に集結する。この時「兵数は全体で約三五〇〇名、最大兵力三万名以上だった薩軍は、一〇分の一になっていた」。弾薬や銃も食料も不足し「薩軍兵士の食事は粥一杯で、弁当も持っていないかつた」という状況の中で激戦が行われる。雌雄は決し、西郷隆盛は陸軍大将の軍服を焼き捨て、解軍宣言を出す。この後、西郷は政府軍の意表を突き、側近と共に可愛岳を越え、包囲網を突破し、鹿児島に入る。城山に立てこもつた西郷らは、九月二四日早朝政府軍の総攻撃を受け、最期を遂げる。

西南戦争は城山で終結するのだが、実質的には和田越の

戦いで薩軍は消滅し、終焉を迎えている。延岡は、薩軍が敗北消滅した地、西郷らが可愛岳を登って嚴重な政府軍の包囲網を突破した地として知られていた。

田山花袋は「日向の海岸」の中で、船中から「遠く碧く連互した山嶺を見た」時のことを、次のように描写している。

「それは美しい大きな一大峰巒であつた。雲のか、つてゐる形も里近い端山でないことを示した。

『三田井の方の山ですな、あれは？』

『さうです。』

『高千穂などのある山ですか？』

『高千穂はもう少しこつちになるでせう。』

と其人は左を指さした。

兎に角九州山系の連峰であることだけは確かであつた。

(略)一面阿蘇に接し、一面霧島に接してゐる一大峰巒である。その翠嵐の中に那須など、いふ山村があり、又向う側には、あの有名な五家荘があるのである。かう思つて私はぢつとその遠い山の翠色に見入つた。

『あれが可愛岳ですか？』

『さうです。』

『西郷の囲まれた…』

『さうです。』

かう言つたが、『あそこから囲を衝いて、椎葉、那須の山の中を通つて、西郷は鹿兒島へ帰つたんです。』

『さうですか…あれが可愛岳ですか？』私は手にした地図を展げて見て、『ちや、此方にごたごたと人家の見えるのは、延岡の町ですな！』

『さうです。』

有名な可愛岳は小さい瘤のやうな山であつた。注意しないと、その背後を塗つた深い山巒にかくされて了ひさうであつた。私は西郷が宮崎から段々官軍に追ひ詰められて此所にやつて来さまなどを想像しながら、じつとその小さな山影に見入つた。汽船は今丁度五箇瀬川の黄い海に落ちてゐる沖を通つてゐた。

田山花袋は船上から遠くに見える山を見て、即座に「あれが可愛岳ですか？」西郷の囲まれた…」と言つている。可愛岳であることを確認すると、西郷が追いつめられて延岡にやつて来た様などを想ひ描いている。

明治時代の人間にとつて、西南戦争はかくも身近な出来事であり、延岡は西郷の可愛岳突破で広く知られていたのである。

田山花袋と同時代の人間である夏目漱石も同様であつた。漱石が松山に赴任したのが明治二十八年、西南戦争のわずか十八年後である。熊本第五高等学校に赴任するのは、その翌年である。熊本にあって、西南戦争の話題に触れないでいられるわけがない。当然隣県である宮崎の戦闘、特に延岡での和田越の戦い、可愛岳突破にも通じていたはず

である。「坊つちやん」で延岡が「山の中も山の中も大変な山の中」とされたのも、可愛岳突破が広く世間に知られていたからであろう。

漱石は明治四十年に池辺三山の訪問を受け、朝日新聞社に入社することを決意する。その時初対面の池辺三山の印象を、漱石は「西郷隆盛」のようだと述べている(池邊君の史論に就て)——『明治維新三大政治家』再版序——『漱石全集』岩波書店。

「池邊君の名は其前から承知して知つてゐたが、顔を見るのは其時始めてなので、何んな風采の何んな恰好の人が丸で心得なかつたが、出て面接して見ると大変に偉大な男であつた。顔も大きい、手も大きい、肩も大きい。凡て大きいづくめであつた。(略)夫から話をした。話をしてゐるうちに、何ういふ訳だか、余は自分の前にゐる彼と西郷隆盛とを連想し始めた。さうして其連想は彼が帰つた後迄も残つてゐた。勿論西郷隆盛に就て余は何の知る所もなかつた。だから西郷から推して池邊を彷彿する訳はないので、寧ろ池邊から推して西郷を想像したのである。西郷といふ人も大方こんな男だつたのだらうと思つたのである。此感じは決していたづら半分のものではなかつた。其証拠には、彼が帰つた後で、余はすぐ中間に立つて余を『朝日』へ周旋する者に手紙を出した。其文句は固より今覚えてゐる筈がないが、意味をいふと、是迄話が着々進行して略纏

まる段になつたにはなつたが、何だか不安心な所が何処かに残つてゐた。然るに今日始めて池邊に会つたら其不安心が全く消えた。西郷隆盛に会つたやうな心持がする。——ざつと斯んなものであつた。』

池辺三山を見て西郷隆盛のようだと思つたと言ひ、西郷隆盛のような池辺にあつたら、それまでの不安心が消えたと言つている。池辺に対する好意と信頼は同時に西郷隆盛に対するそれでもある。漱石は最後に池辺が西南戦争で戦つた池辺吉十郎の子でもあることも紹介している。

「池邊君は、西南戦争の時に有名であつた池邊吉十郎の子である。其時代にはたゞ十三四の少年であつたから助かつたのだらうが、もう少し年を取つてゐたら屹度軍に出て討死をしたに違ない。池邊君は討死をしに生れて来たやうな男らしかつた。さうでなくつても、今二十年早く生れたなら、必ず維新当時の渦中に飛び込んで、国家の為に働いたに違ない。」

池辺三山の父「池辺吉十郎」は薩軍に加わつた熊本隊一五〇〇名の大隊長であつた。小川原正道著『西南戦争』には「池辺は、西洋化の風潮や不平等条約、樺太千島交換条約などに不満を抱いており、問題の根源は数名の『権臣』にあるとして、その廃除の必要を感じて慨嘆していたところ、西郷蹶起の情報を受けた。」とある。漱石は「西南戦争の時に有名であつた池辺吉十郎」と言つている。熊本隊の

隊長を有名だったと言うほどに西南戦争に詳しく、関心を持っていた。であれば、西郷隆盛の可愛岳越えを知らぬわけがない。

黒須純一郎は『日常生活の漱石』（中央大学出版部）の中で、次のように指摘している。

『明治の終焉日記』（一九二二「明治四五、大正元」年六月一日）にある『行啓能』に招待された折に感じた漱石の皇族と陪臣たちの立ち居振る舞いに対する印象は、彼の立憲君主制の理解のほどを知る上で興味深い。まず漱石は、皇族方の態度が敬愛に値すると評し、それに引き換え陪臣たちの態度は目に余ると非難し、その成り上がりぶりを批判している。さらに注目すべきことは、冒頭、山県「有朋」、松方「正義」と呼び捨てにしているのに対して、「乃木さん」と好意を持って呼んでいることである。後の小説『心』で明治天皇の崩御に殉死する乃木希典を同情的に描いた漱石の心情が窺い知れる。」

乃木希典の殉死は、西南戦争での連隊旗喪失事件に関係している。熊本県植木での薩軍との戦いで撤退する時に旗手の少尉が斃れ、軍旗を奪われたのである。

漱石は大正二年一月に第一高等学校で行った講演「模倣と独立」でも乃木希典に触れ、乃木の行為は「至誠より出たものである」と言っている。

乃木への好意に対して、「明治の終焉日記」で「山県」と

て、かつばれを済まして、柵の達磨さんを済まして丸裸の越中禪一つになって、棕櫚箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出す。」

漱石全集第二巻「坊つちゃん」の注によると、この「日清談判破裂して」は明治二四、五年頃から流行した壮士の演歌「欣舞節」の一つである。この後は「品川乗り出す吾妻艦（東艦） 続いて金剛浪速艦 国旗堂々翻へし 西郷死するも彼がため 大久保殺すも彼がため 遺恨重なるチヤンチャン坊主（略）」と続く。「チャンチャン坊主」は当時の清（中国）に対する蔑称である。

別のバージョンもあるようだが、いずれも歌中に西郷隆盛が出て来る。延岡へ転勤する「うらなり」の送別会で、野だは西郷隆盛の出て来る「日清談判破裂して」を歌い、踊る。前述したように、欣舞節の挿入は「坊つちゃん」の舞台が日清戦争当時であることを表している。同時にこれは、延岡が西南戦争との関係で設定されていることを示している。

佐谷眞木人は『日清戦争「国民」の誕生』（講談社現代新書）の中で、この欣舞節と西郷隆盛の関係を次のように説明している。

「問題は『西郷の死』である。

そこから見えてくるのは、当時、政府を批判した勢力が、西郷を熱く支持していたという事実である。西郷は死して

呼び捨てにされた山県有朋は、乃木や西郷とは対極にある人物として認識されていた。伊藤之雄著『山県有朋―愚直な権力者の生涯』（文春新書）には、そのカバーに「陸軍と官僚を支配下に置いて山県閥をつくり、デモクラシーに反対し、みんなに憎まれて世を去った元老・山県有朋は、日本の近代史にとって本当に害悪だったのか？」と記されている。ここには世間の山県へのイメージが端的に語られている。山県は、西郷を敬愛し、山城屋事件の際には西郷に助けられもしている。その山県が歴史の巡り合わせとは言え、西南戦争時には政府軍の参軍として指揮し、西郷を追いつめ死に追いやったのである。延岡での戦闘で西郷軍を包囲していたのも山県である。山県は西南戦争後、東京の目白に一万八千坪の土地を購入し、椿山荘と名づけた。こうした行為も「至誠」とはほど遠い印象を与えたのかも知れない。

いずれにしろ、夏目漱石が西南戦争に深く関心を示し、詳しく知っていたことは間違いない。延岡は西南戦争との関係で「うらなり」の落ち行く先に設定されたのである。その事実は、なにより、小説「坊つちゃん」自身の中に記されている。

六、野だの歌う欣舞節「日清談判破裂して」

うらなりの送別会で「野だ」は「既に紀伊の国を済まし

なお大衆に熱烈な人気があった。欣舞節には、日清間の戦争の勃発が具体的に歌われている。当然ながら、この歌はたんなる流行歌ではなく、反政府の政治的プロバガンダを目的として作られた歌である。とするなら、それは来るべき戦争を『避けがたいもの』として予見していた、というような生やさしいことではない。

当時の民権派は、「国権の拡大は民権の拡大にもつながる」という論理から、『対外硬』すなわち戦争をも辞さない強硬な外交姿勢を強く主張していた。この歌は民権派が、清にたいして弱腰外交の政府を痛烈に批判し、『戦争をしろ！』という強硬な要求を在野から突きつけるための歌だったのだ。そのとき西郷は、清にたいする武力による強硬な外交を主張した英傑として理想化され、光が当てられているのである。つまり、来るべき日清戦争は『征韓』という『西郷隆盛が果たせなかつた理想』を実現するための戦争なのだ。」

西郷隆盛は既に、明治二十二年の大日本帝国憲法発布による大赦によって名誉回復を遂げていた。

佐谷眞木人は「西郷は民衆のあいだでは英雄でありつづけた。日清戦争にいたる精神のありようを考えるなら、そこには深い関連を認めざるをえない。日清戦争はたしかに、明治六年に西郷の提示した『征韓』という精神を、形を変えて引き継いだ戦争だったのである。」と言う。支持の形

はともあれ、民衆の英雄であり、漱石からも池辺に会って西郷を思い浮かべ不安心が全く消えたと言わしめた西郷である。その西郷が陸軍大将の軍服を焼き捨て、解軍宣言を出し、西郷軍が壊滅した延岡こそ、「聖人うらなり君」の落ち行く先としてふさわしい所だったのである。

付記

論中でも述べたように、「日清談判破裂して」が大流行したのは日清戦争当時である。したがって「坊つちやん」は執筆時(明治三九年)ではなく、明治二八年頃が舞台である。当時延岡には藩校の流れを汲む私立中学・亮天社があったが、延岡中学校は開学していなかった。創設されたのは明治三二年である。漱石が亮天社を知っていたどうかは分からないが、亮天社が松山中学より五円も高い給料を払って「うらなり」を雇えたとも思えない。やはり、執筆時には開学していた延岡中学を転勤先として想定していたのだろう。

*参考文献

中村地平 「仕事机」筑摩書房 一九四一年
平岡敏夫 「漱石 ある佐幕派子女の物語」

おうふう 二〇〇〇年

石川恒太郎 「県北交通物語」「延岡の二城」延岡新聞社
一九三五年

田山花袋 「山水百記」博文館 一九三〇年

小川原正道 『西南戦争』中公新書 二〇〇八年
黒須純一郎 『日常生活の漱石』中央大学出版部

二〇〇八年

伊藤之雄 『山県有朋―愚直な権力者の生涯』文春新書

二〇〇九年

佐谷眞木人 『日清戦争「国民」の誕生』

講談社現代新書 二〇〇九年